プロジェクト第一弾の「オロロジカルマシーンNo.1」は、左右に文字盤を従え、通常の時計より一段高く突き出たトゥールビヨンのキャリッジが目を奪う。その姿は、未来から飛来した未知なるマシンという印象さえ与える。

マキシミリアン・オロロジカル ラジカル

マキシミリアン・ブッサー&フレンズ マシーンNo.1

ルな夢の結晶

新しいコンセプト、メカニズム、テクニック、マテリアル……時計業界は、驚くべき速度とともに年々進化を遂げている。ハリー・ウィンストンの「オーパス」はまさにその象徴だった。2005年までそのプロジェクトを主導し、つねに目を見張っていたマキシミリアン・ブッサー。独立を決して出ることのないマキシミリアン・ブッサー&フレンズは、まさに先をゆく「時」、時計という、どこかもが時代未聞の計画に迫る。

菅原 茂 文
Yoshi Sugawara
秋田大輔 写真
Photographs by Daisuke Akita

2006年春のバーゼルワールド会場で、マキシミリアン・ブッサーとばったり会った。うっすらとヒゲをたくわえ、ジャンズにジャケットを羽織ったその姿は、ハリーセルワールド会時代のあの一分の隙もなく、ブッサーとぼっ込み、貴公子然とした雰囲気を醸し、ジャー放つ彼とはまったくカジュアルに洗練ックスしており、ネクタイ・ウィンストンな雰囲気さえ湛えてもなくスーツを着「まったく新しいプロジェクトのオーラをしている」と嬉しそうに笑顔のようにリラから、前代未聞の時計を少年のようにワクワクしていることは察せられた。

「お楽しみに！」

プロジェクトが進行そこで質問の矛先をさらに進める彼の言葉たちの写真はどういう目的でつくりに携わっているのだろうかたずねてみた。子供たちが、あくまでもMB&F（マキシミリアン&フレンズ）の計画を考え、「あの子供したときに象徴的にどう表現するのか」とである。たくさんの他たちの写真とは、ジュした無邪気なリアン・ブッサーたいどのようなメッ時を彼が初めて明かいるのだろうかと、に絡われていたものいたからである。の子供の顔をコラー

「私たちはいま、ロジュアルに、いっメッセージが伝えられて、すっと気になって

「オロロジカルマシーンNo.1」は、東京・銀座の高級時計専門店「アワーグラス銀座店」を通じて販売される。マキシミリアン・ブッサー氏（右）と同氏代表取締役の秋井義氏（左）は、やはりMB&Fの盟友である。

いる。価値の可能性を信じながら、プロジェクトに取り組んでいるところです」と意味深な笑みを浮かべる。謎は深まるばかりだった。

マキシミリアン・ブッサーが、その後初の来日を控えて来日したのは、5カ月後の9月下旬のことだった。東京・銀座の高級時計専門店「アワーグラス銀座店」で初めてプライベート・ビューイングが行われたのだ。

彼が目の前に差し出したのは、不思議なかたちをした時計だった。他目く「ウォッチではなく、これが初のオロロジカルマシーン」であるから、ラウンドケースの腕時計をたつ台座したような外観はまるで手のようにも見える。中心に

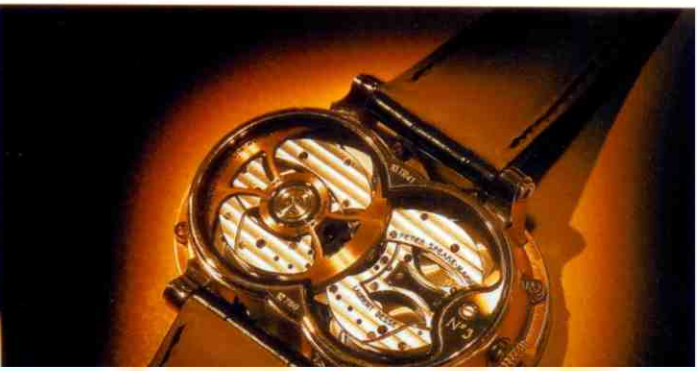
トゥールビヨンがあり、それを挟んで左側に時間、右側に分の文字盤が配されている。時間を表示する一種の装置として見れば、たしかに「ウォッチ」と呼んでもおかしくはないのだが、彼はあえて「オロロジカルマシーン」と命名する。「オロロジカル」とは「時計の」という意味であり、「マシーン」は「種々の部品が集まって作動する機械」を指すので、概念上では「時計」と変わりなく、言葉のレトリックとも受け取られそうだが。

「これまでの〝ウォッチ〟は、あくまでも伝統の延長線上でしかなかった。私のオロロジカルマシーンは、たしかに時刻を表示しますが、そのような伝統と断ち切れたところから出発しているのです。精密工学の粋を集めて作られた、時を告げる立体的な彫刻のようなものなのです」

さらに、彼との会話の中で、創作の真意を読み解く鍵が見つかった。それはDNAの否定という発言だった。

「著名なブランドは、つねにDNAを強調し、一貫した個性を謳いますが、私はアンチDNA、アンチ伝統を掲げ、なにものにもとらわれない自由な発想で創作を行いたいと考えていました」

ハリー・ウィンストンの「オーパス」シリーズを指揮し、知る人ぞ知る独立時計師たちを世に送り出したのも、根は同じだろう。だが、自由な創作のためには、「自分自身もエスタブリッシュされたブランドから自由になることが必要だ」と考え始めていたという。彼は、ジャガー・ルクルトを経て、1998年に31歳の若さで、ハリー・



ウィンストン・レアタイムピーシズの社長に就任。在職中の7年間は、時計のデザイン、開発、製造、マーケティング、販売まですべてを統括し、総売り上げを900%も増大させた。毎年発表される「オーパス」も脚光を浴び、すべてが順風満帆だった。しかし、昨年の夏にその職を辞し、たったひとりでMB&Fを立ち上げたのである。

最初の構想は、すでに2003年に芽生えていたという。ジュネーブに戻る長距離飛行の中でのことだった。

「私は円がふたつ重なり合う時計を思いつきました。一方に文字盤を置き、もう一方は独立時計師に自由に遊んでもらうようなフリースペースとして提供する。そんな漠然としたイメージが浮かんできたのです。紙にペンを走らせてスケッチしているうちに自分自身わくわくしていました」

そんな一枚の、本人曰く「落書きのようなスケッチ」は、やがて時計デザイナーのエリック・ジローによって立体的なフォルムへと仕上げられ、エンジニアのローラン・ベッセや独立時計師のピーター・スピーク・マリンらの協力によって斬新を極めるトゥールビヨン・ムーブメントが設計され、徐々に「オロロジカルマシーンNo.1」へと姿を変えていったのである。

「製作に携わったのは、それぞれの分野で才能を認められた優秀な個人ばかり。すべて、共通の価値観を分かち合う私の友人です。楽しく仕事のできる少人数の仲間たちと、同じ夢の実現に向けて働くのが、以前から私にとって理想だったからです」

才能が結集したプライベートレーベル

「オロロジカルマシーン」のプロジェクトは、精鋭たちの〝ドリームチーム〟で編成されている。それは同時に〝夢を描く集団〟でもある。

「No.2は、まったく違ったものになります。同じことの延長や繰り返しはありません。チームのメンバーも変わります。でも、参加するすべての友人に共通するのは、子供の純粋な世界観です。誰でも子供の頃は、自分には無限の力があり、あらゆることが可能だと思っていたでしょう。どんなに突飛な夢でも信じていたはずです。それが成長の過程で大人たちから理を含められ、たいていは分別を重んじる平凡な人間になってしまう。MB&Fのオロロジカルマシーンは、そんな子供心を取り戻す〝プレイグラウンド〟です。あれもしたい、これもしたい、こんなこともできそうだ――一作ごとにそんな可能性に挑む場なのです」

したがって、マキシミリアン・ブッサー&フレンズも〝ブランド〟ではなく〝レーベル〟である。音楽ならクラシックからロックまで、さまざまなジャンルがひとつの〝レーベル〟にあるような。

写真に写っていたのは、このドリームチームの面々であり、彼らの子供時代の姿なのだった。しかし、単なる純真無垢なコドモとは違う。なにをしでかすかわからない、周囲を震撼させる「恐るべき子供たち」なのだ。